

厳島神社：大鳥居

大鳥居は宮島のシンボルです。1168 年以来ずっと島の入り口を守るように立ち、聖と俗の間の境界線を示しています。初代の鳥居は有力武将の平清盛（1118～1181 年）によって建設されたものだと考えられています。その後、この朱色の門は何世紀もの間に数回建て替えられてきました。今の 6 本柱の様式になったのは 1547 年のことで、現在の鳥居は 1875 年に建てられました。上部のまぐさの中に置かれた 7 トンの石を含め 60 トンの重さがあるこの構造物は、自らの重みで真っ直ぐに支えられており、海底に埋め込まれてはいません。対になった主柱は樹齢 500 年を超えるクスノキで作られており、腐敗や虫に対して天然の抵抗力を持ちます。朱色に塗られた漆がさらなる助けとなり、木を劣化から守っています。それらの方策にもかかわらず、常に風雨にさらされ続けている鳥居は普段からの修理と定期的な建て替えを必要とします。

ここに展示されている扁額は、1547 年に建てられた 4 番目の鳥居の片側に掛けられていたもので、現在のものと同じ大きさです。後奈良天皇（1495～1557 年）による書をベースにした銅の文字で、厳島神社の以前の名前の 1 つ「厳島大明神」と書かれています。この扁額は当時の（広島と宮島を含む）中国地方の多くを支配していた大内家によって寄贈されたもので、両側に大内家の家紋が記されています。装飾が施された額縁は仏教的なイメージを含んでおり、中世の日本における神道と仏教の密接な結びつきを思い出させてくれます。